



淀屋形金雞新
後
肆

特別
13
3521
9



立居ころ此囊物後の世小煙草入とありて今も猶井戸
屋さげとて其形ちこそ残りたる或日二人の常のごとく彼
囊物をさうく居ころ時ころ外の方人音して誰頼
まんと云けりよと滝五郎不審ふ思ひ一邊の障子を引開
せは是のころ古仙と吾妻がまりしころは滝五郎のあつ嬉
しく且耻うしく先け方へと奥へ通し一別の礼をのべ吾計ら
びも大度と爲いづて家を去り土地を拂ひ少斯る貧し死
身とろころ誰問まらん人もさく富貴も少しか他人集り貧賤
る少の親族離ると中華の人の云おれり然を先生の捨
玉の波新浅まれば荒破屋を訊めり嬉しきよ然れども

吾妻の又疾より身請の濟しる身より然を今まで問まざ
るの抑奈何ころ心根ぞやと恨しけし云々少の吾妻の呵と
泣いづと滝君委女しく知めりしが恨と思はも理りまら妻も
落籍の海しと思ひて主人の長小琥珀絶をとり思ひ死や
道八より三百兩の受らりしれども残りし黄金の海さうる前
琥珀絶を出しづとこのめ又其上小け程の都方の武士とやん
妻を急め落籍せんとて荒増商議の極りしれは昨夜を
櫓の大鼓を敲て曲輪の中を騒動させ甘太公幼もあ抜いで
く仔細と語りく尚も涙おむせびたり古仙も僕も言を
そくて夜中神さだの堤小て吾妻小逢く妻より一放る舟

舎を頼りて船ふねにて爰こゝまで来りしと語りしと落おちりしと語りしと
滝五郎たきごろうの妻つまと毎ごとく嘆なげ息いきし口くちの管くだ道みち八やちが悪あく吉きち又またを憎にくむ
拳こぶしをゆたりて奴やつらりしと斯かくる處ところ外あは面らのくも又またも人ひと色いろ足あし
音ねして神かみ寄よの曲まが論ろん流なが木き屋やの長なが若わかき男おとこを大おほせの社やしろ列り
呼よ門かどもろく動うごとちりり昨きのう宵よ廊らう中ちゆうの櫓やぐらのり大おほ鼓つづみ
を鳴なりて曲まが論ろんを騒さわげせ刺さへ櫓やぐら看み主ぬしの男おとこを打うち殺ころして逐あ
電でんろくろくけ吾われ妻つまを今いま此こゝ家うち小こ舎か匿かくまけが諸もろ俱とも小こ罪つみ
人ひとろり一人ひとりも残のこさば社やしろ控かへりて縣あま令さし小こ訴うたぐ覺かく悟ごせよと
ぞ喚こゑたりしけ言ことをゆりりも吾われ妻つまの立て閑ひま々々に二ふた次たぎの長ながが
前まへ小こ居ゐり妻つまが落おち籍せきの支し極ごくまへ二百ふたひゃく兩りやうの證てい金げんを進ませ

滝君たききみ勿な心こころち禍わざはひひ小こあひて斯かくる容ゆる子こ小こ苦くるくそめめ夫そのと余よ
死し小こ三百さんひゃく兩りやうの證てい金げんも返かへさば外あはへ落おち籍せきをさる玉たまのんとの
主人あかの君きみの僻ひがまろり上うへ小こ曲まがの出いる時とき下しもも又また曲まがりし
や然さ主人あかの心こころろり小こ妻つまも覺かく悟ごを極ごくめれば櫓やぐら小このりて
太おほ鼓つづみを敲たたて曲まが論ろんを騒さわげせ立た退ひき其その罪つみゆとりの重おもく
とりどりの櫓やぐら番ばん曲まがを殺ころせし一向つやこ覺かくえぬるは支しまろり妻つま
がかよした女むすめの身み小こて然さむくつびれた櫓やぐら主ぬしをさるでさう殺ころす
この爲ためべれたや能よ思おもひても見み玉たまひひ從よそぬ仲なかつゆせち小こ妻つま
が死し爲ためとの玉たまのり太おほ示し何なにとも証せ術じゆつろり今いまより其その方かた罪つみ人ひと小ころり
さへらん疾はやく妻つま小こ繩なはつけて縣あま令さし小こ引ひ玉たまへと身みをさるり付つけ

覚悟の光景流の長も大の小忙も黙然として立てるなり
は時忠作ささ出て流の長小向ひてのめやう今吾妻を
人殺として縣令小訴へ玉の五吾妻の極めて殺さるべし然
して何の徳も有ん小生一向肯もうは槽をんの死すること
吾妻が死爲小非ざる事云までも有べしは非常の大鼓
を鳴せし曲編を騒がせてのさゆして格別の罪小のわじ
流の廊中の長流の足下小免あり曲編の者ら得
心はぐ斯死を極めたる吾妻も再び再度廊中へ連行と
も勤めをせざるの知らる事強てさせんと爲とれたの自害ゆて
も爲とれ是又瘡小うけたる若く然仇ごとせんとよりの吾

妻を小生小つゝの久従良の残金残アまゝと一の切ひがに
二百両めて負あり小生よろ進べた小是めてキを打
あつゝが双方とも小無事アうはやと言を尽して云々れど
も流の更小入は曲編の法を犯せし女を其小捨ち
とれた後の女の戒りとうはせし小今より引連行て縣令
小訴へると吾妻を捉へて引立たるを古仙も同くは
つよりて長を和めて百般とほつゝ備りて云々小音小
たし長も心をめて然が吾妻が残アの身の代二百兩越はる
が夫めて律と海はべしとの中心作が吞へて云やう今とひてた
出来が四五日を待めると二百兩まわはるべしは義の以行

三巻前古...

律



小笹金を
 投らちう
 吾妻と忠
 作を救ふ

とのひつらぬが流の長又曰く汝一封の證文と小書するが五日
 の間を待てとの忠作答て證文の思ひする何れとも認
 むべしと頼て硯を取りて一枚の紙小さくくと證文
 を認めをとり流が手ふとくく長に證文を受取を
 さめ然れ五日を経て来るべしと古仙ふの二礼のべつたせの
 者を批列て神さたさしてぞ返りける然して勿念ち五日
 をこえて流が方より一人の男小彼證文とめてせて三百兩
 を受とり小越せし忠作をいめより當りた日延をとり
 おたられは日さく小整の流又二三日と云延くくるが三日
 過ぎて又来るを又明日と云て返りて何れとも云説

如何のせんと思ひつぐの意を勞めて居る

小笹鳥小妻

久原高の娘の小笹を井戸屋へ送りて生屋を樂ま
 んと思ひく妻も然と消て今何れも詮術なく然が今よ
 小笹を外へ嫁入させて別小縁族を求めたやと小笹小
 再嫁を流くめらぬとも小笹の更小引引はしめやう都
 て貞女の二夫を更流彼漢土の杞良が妻の二日添へて
 小別と死るまで操をまめり又秋胡とやらんが妻の五日
 夫と去心流百年の命を捨て節する心と人小知ると
 是らの妻の父君の豫々として人あひするはや然と今よ

つて再度外へ嫁入せよとの尊言相語てきものどくまうと耻
 してて云々小ぞ高年ゆ詮方多く其怪ゆして捨ちなけ
 了然つ小け程小うて小笹奈何るる心う起りらん父小むら
 ひて云々るやう願くは妻をして家富る人の方へ小妻給事お
 出玉つるべくとり高年非めて忙し或心ひまら頃你小再嫁
 の支とほぐめし時の滝五郎へ操とて是と固辞ふの
 非びや今ふうて最賤した下妻奉公のきんとの抑如
 何るる心ぞやとのひくまが小笹吞へて是ふ深き仔細ある
 こころ願くは急小小妻小出給りしと云けりゆぞ
 高年吞へて你が今ゆ詞のち仔細あるはたこころも

吾の今より急小洛阳小要用あり你が為小の別腹りの
 兄高悦を京都へ医学小遣くおたつるかけ程の名医と
 ろうて不思もん許小めし抱へさせめ小依て早卒小迎
 へふおろしとれげ今宵夜舟小て行るむば二三日の彼地小
 あり帰つて後の左も右もまらの支と高議さぶその
 間ハハとつけ能看舎せよと云々むが小笹是をゆめて仲
 心得さるひぬと噫へたり斯て高年ハ其夕べ舟小のりま
 洛阳の方へぞ赴きたる其次の日小到りて豫ては家小奴子
 婢女と經紀人けり老婆ありしが高年が石左と知り
 未だりて小笹小見えていりやう小笹の脚ハ井戸屋へ御縁

極う有しが滝君彼どくろ行のひさねが今御縁も絶
 こころ等しく然し又外へまると嫁入りの尊尊愚ふちとほや
 旨多のの小笹こゝろ滝君彼ど死身の上とまりぬへ妻と
 不通と思ひ断て侍らう然し外へ縁づく更も好まら
 りに妻の唯富らう入小妻奉公小糸らんと思ひまらと
 を經紀人かく是をばみて小膝を八打とうちて云やう儲め
 渉り舟とのみ更のけこまらう此頃東国への商人めて活
 業の爲け地小末う逗留のめ御方あり去る日け邊りを
 通うて小笹の御を一目見て頻うみ意ふこゝろめひ黄白づく
 めて成更らうバ万望の小笹の御を小妻小抱へて東国へ

行くと日ひぬむと小笹の御の貞女入父君の堅苦死御
 姓質るぬが逆も悟りぬとぞと思ひくままでの黙止らう然し
 今より小笹御のみの東国への入行の御心の侍りほやと
 向るぬ小笹吞へて夫の耳よりの更らう妻の黄金三百兩
 給り御方らうで夫のわらうととのみ經紀人かく吞へるの
 三百兩の愚のこゝろ你さ入行玉の五百兩でも給りらうと
 のが小笹又のい其金もろみ丑立の中小欲く思ひまらと
 經紀渡りのやう黄金の今めても給りらうのよく你行
 給りんとらうが吾備今より故うて金受とりて未だ進ん
 一とのみ小笹こゝろ三百兩の黄金もろまの間の間み給りら

らが妻が身の奈何なにかあつとも苦くるかゝる願ねがふ伯母おたご御前ごぜん
 とく討うちつひめ入いり人らへ老波女らうばのころえ然さらば些ちてく待まちめひね
 吾わが仁に備ひ一ひと走りはしり行いて金受かねうけとりて来きて進まへばと把とめのも株うけ
 あへば走りはしりてこそこの飯いりも夫そより小笹こささの桌子つくふ向むひ硯い
 ひ糸いとよせ墨ぼく流ながる流ながる何なにふらあゝん文章ぶんしょうさるぐと認まりけ
 る益い過ひるちどゆるうて経き紀ぎ老波女らうば宙ちゆうをとんで駈かまふ小笹こささの
 前まへ小こ二百兩にひゃくりゆうの黄わう白はくをさるぐ置おきさて云いやう小笹こささの御ごの切き玉たまの
 ごとく二百兩にひゃくりゆうの受うけとら来きてこれ唯ただ今いま你あなた小笹こささと子こらう然さらども爰こゝ
 小一箇ひとの難なん義ぎあり彼客かのきやく人ひと翌あしたの夜よ舟ふねふて最も早はや出で立たつあ
 んと曰いふまう小笹こささの御ごの父ちち君きみの御ご者しや全ぜんるゆゑ奈何いかんあつともん

と思おもひのうつとりの人ひとが小笹こささがのめやう父君ちちきみの豫よて相あらたあつた
 せむ値ち行いるめのとて昔むかしかゝる然さらば日ひのどく翌あしたの夜よ管くだひ未まか
 るべう方望むかの伯母おたご御前ごぜん天あま晚ゆふてうう迎むかへよ来きて給たまへといふ
 老波女らうばの點ち頭づかころろえて去さが翌あしたの夜よ来きまふぐよく支度しどして
 居い王わうひの口の管くだ小喜こき怡いのさる吾家わがをさうてとて飯いりくる
 斯かて小笹こささの婢めかけ女によをよひて父高ちちかう向むかが豫よて来きありく轎こし見み夫つと
 か家いへめつらう急いそめ大轎おほこし一ひと挺たてか糸いと未まれと云いふ遣つかるれが轎こし見み夫つと
 を心得こころえて立た地ぢ小大轎おほこし一ひと挺たてあつて二人ふたりの男おとこ是こゝを見みて来きりけ
 せむ小笹こささの早はや卒そつ小梳こ妝づかけ乗のり轎こし小打こうちのりて何なに死しともま
 く出い行いで行りたり

小篋救吾妻

夫の儲置を爰ふ又八幡の忠作が家ゆゑの日の黄の昏ふ
 木屋の若の者三四人入まはり約束するが五妻が身の代り
 受とらんと言はく小喚はる忠作奥より出まはり若の者
 小向ひく云やう今朝の程より滝五郎ぬくの五妻が身
 のころ調達小洛陽まで来ぬと云はる飯り未め其の間
 を此二〜〜免して待めと云はる若者ども皆入は常例
 の言説や耳ゆゑは鶴鴉の鳴ききやう何時まで
 と云延くても斯る破世帯めて君々の黄の調やうの
 道も〜不要の爰ふ日を費は爰まで毎日通ひての難費

して穴電が滅くるとの唯今日日延もまはる空手でも帰
 ば黄の花が調達の吾妻をこそせ吾妻をうらばの身の價
 おこそ何方方あるとの片付つけよくと迫はる忠作大
 の小困も果然むらり小迫めはる責めて君まで待めは
 君帰らぬべし今又休くも漫り小吾妻を連行めは是
 一人を殺はる治定益うたをせんあつ今女〜待玉た
 東も西も調達は〜と皆まで岡ぬ廓中の者ども吾妻
 死うが生やうが吾君の夫ら小依は黄の全うと吾妻の
 と引て返すは後義のはる先五妻を受取べしと発乱
 と園ふけ入吾妻が唇引つらして外向の方へ扯行とらる

を忠作慌忙と推考うるは是は分る衆人々責て今宵
を待玉の女々の目鼻も付べたゆめを左ても右ても吾妻
のやゝ待わくと扯止ると曲偏の者ども大の怒りて妨
げまゝに打倒せよと忠作を扯扱へて或の踏つ或の擲つ散
散れ打擲して吾妻を引立出んとする時外の方より人々
して吾妻の身の代りとして卒受把と云ふがう動
扱こむ金賤豪若の者が頭小あつて彼方へ八打と落こ
ろ若の者の天窓より人疼しくと跪居忠作のおどろけ
忙し唯惘然と云ふも死へ大轆一挺内庭まで見入させ
のづら女を見れば年の頃十七八美濃るる夏玉より清く艶色

ろつこと甚せゆの勝つと目もあやうる色衣着るる困々
通り若者ら小打向ひ徐らる廓中の者よの妻の滝五郎が
妹ゆて都方の堂上小宮仕して有ものぞや兄君小つと添
まゝ吾妻の御の身の代金とて査勘て受とりゆと言爽ふ
云々少し曲偏の者亦い違出て彼賤豪より金把を二百両
数點一卵受把がれして指のゆ天窓を打込一人の男む
くくと起上り何科ありて吾頭子小金賤豪を打つけて斯
大のうら瘤をでるせし疾々治せと迫らばはる娘の完示二打
咲ひ金賤布を打付る如何ゆの妾が鹿忽るむと瘤の
発る天窓の簾相妾が知る夏玉あはは御より忠作を打

擲して以て衣引破り髪を乱せ返報ふい夫ららの瘤を
 てとりのかへたる彼物語りの夫ららで男がらうらうらあさう歯の女
 児曲輪の者ららの怖れをうらうら不去と往めと立上り彼一人
 の頭をうらで発する瘤小唾をぬり撫廻りく儲もく世の中
 瘤をうらうら鬼さあある小瘤をつけゆる女兒のありとら宇治
 拾遺ゆの見えざる夏よと獨言に打連立て神寄さうら
 ぞ帰らうら吾妻の彼女児小向ひ儲の滝君の妹御もて御座
 うらうら今まで滝君の物がうらうら信文うらうら一向に進
 せざうら無礼のうらうらあひひうらうら妾身の代小黄の金と費し難
 鳥を助けて玉うらうら御恵の土心せのせど先父公ゆの妹御の

御出を知らせ進せんと立上るを止止め否父御ゆの知らるせそ
 妾の北の臺の御用を愛する男山の八幡宮へ御代糸ゆまのり
 今宵の祢宜が方お泊りさるる俱人らうらうらこゆ残しおき
 兄君ゆ逢まあうせんと斯恐ひひてまかりうらうら兄君の値行と
 のい何うの知は騒さうら門外お容子を詞へを吾東の御の
 身の代金を廓中の者らうらうら泊るおそ日有合まうら二百両ふて
 け場の難鳥を故ひうら兄君ゆ添ぬら吾妻の御の更らうら
 妾が実の妃嫁と思ひまうらうら父君も病と氣とあゆ見
 え進せせうら思ひぬゆと久々あての逢瀬るさうら物語り小更
 うけらん去ら今宵の祢宜が方お泊り翌の下向ゆ又表りて何



金葉和歌集卷之九

廿三

くれとて談話らめ父君ゆの兄君ゆめよく云て給ひひ
 捨立んとまけつを忠作の袖をひく人借も怪つたまを
 小生幼雅とたつ井戸屋へ給仕み知つは年まで勤
 るわひづつ小滝君の御妹君ありとつ入ることを聞
 抑脚名を何とつ曰ひく何ゆの堂上仕へとつ入
 問々しをかの女児とつちつひて原末滝君の井戸屋へ
 子小行とつひつるつが妹とつるつがまを伶とつがし
 らざつものつるつる滝君帰つるつるひるが妾がま
 訊ねと云つ懐中より小さら服袋づを取出し滝君
 あひる是とつ手通て給つは裡小の種々の写のつありこ

せを讀ま何まも分アまん然と滝君へ見せぬ前小
 間たつあひそと鈴印つけてを渡つは忠作是を受とつ
 小彼女兒のや大輪小乗とつるわ吾妻のるれぐ礼のへつ
 門邊まで出たれを忠作もつるつる輪走らる乗物の引
 戸と拵と立まると何とつらん輪の裡小呼と二言つた小
 ち吾妻のつ下つ忠作も弁と駭く其間小輪走らる乗拵
 見あげて飛とつ小駈さつる二人の者り不測小あひ怪
 ころころ裡小入東西物ころころ間小ちや半時たつる
 小ころ時ころ滝五郎あつるまつる小待設つる中心作吾
 妻進とつて云つるや御小の花街の者らまつる身の代金

金瓶梅新評

五

の三百両調ぼの吾妻を連行んと殆々困と侍とをりぬ滝君
 の御妹君まうめい身の代金三百両を給りて花街のうらま
 絆はるるの喜怡玉へのくゆる滝五郎眉をひそめ吾
 侑あとの妹とてのり賞えさるる夫の奈何う翻語ゆやと
 云るも吾妻への服紗づきを取て是其妹君より滝君へ赤
 せこのよと曰ひて付与めい物もは是れは解てんあひるを
 疾分り侍りんと滝五郎ゆりてくぬを不測さるるも手お把
 て釘おきり服紗をひりけを一通の文書あり表書きゆりて
 夫の御めと小笹よるとまうる滝五郎おどろは是去頃
 親々の商議めて結納まで把交して吾と海が妻めせんと

云く高と母が娘小笹が手跡儲心得ぼとのり早く封
 じぬわ切詰くは其文お曰く
 コノ本ゆりてのりも君ゆりてひまわつたまへい
 父母のめゆりても其ありて婚の人の目をくらめおと約
 コノびら又其ゆりてやふりてやふりてお妻のつらとや
 場お心くらりひりてをを秋のねとひてさせぬ人
 ねめのりてのり恨めりて思ひゆりてくははるるゆり
 折子をゆりてお妻あゆりてをを秋のねとひてさせぬ人
 うけぬりゆりゆりぬさる事とのりあゆりてそのゆり
 滝君のおまへけとゆりてのりてのりてのりてのりてのり
 身の早お報せと

